

高齢者との関係を考える

看護学部看護学科助手 金谷優輝 (2021.8.30)

本書の冒頭で、おむつに排尿したため交換してほしいと訴える高齢者に対して、ケア提供者が「もう少しで交換する時間だから待っていてくださいね」と答える場面が挙げられています。このような場面を、もしかすると学生の皆さんは実習で見たことがあるかもしれませんが。本書では、介護場面の行動抑制の例を皮切りに、「自分自身との関係」「社会との関係」「家族との関係」から成る「関係」がどのように障害されるのか、高齢者を縛らないためにはどのような関係が必要なのかが、筆者の人間観とユニークな発想に基づいて述べられています。本書は介護場面を例に構成されていますが、看護に置き換えてみてもよいでしょう。病院という制約のある環境で凝り固まった私の考え方が見事にほぐされた一冊でしたのでご紹介します。

1. 関係の前提

環境が悪いからとか、社会が悪いからという言い方は、どこか自分の責任を放り投げている…私たちは、老人の前に、社会そのものとして現れているし、私たち自身が最も影響力を持った環境そのものなのです。本書.p.72-73

冒頭のおむつ交換の例を取り上げると、「おむつ交換の時間ではないから」といった言葉は往々にしてきかれます。しかし、このような関わりは高齢者のプライドを喪失させる『自分自身との関係の障害』につながります。ケア提供者自身が高齢者に大きな影響を与える存在であることを自覚し、「決まり事だから」「社会ではこうなっているから」と甘んじるのではなく、仕組みを変えるように働きかける責任があるのだと考えます。

2. 同じ目線に立つことができているか

認知症老人から私たちを見ると、脅威なんですよ。頭のいい人たちばかりですからね。天才、秀才の中に自分一人がいるようなものです。それでは落ち着かないでしょう。けれども、老人同士の横の人間関係みたいなものが成立する中では、認知症の人もちょうんと落ち着くわけです。本書.p.290

普段ケア提供者と落ち着いて話ができない認知症高齢者が、他の認知症高齢者とは、内容がかみ合わないながらも、雰囲気合って長く話す場面が紹介されています。私も覚えがありますが、権威のあるいわゆる「偉い人」が集まる場では萎縮してソワソワしてしまうものです。いくら、腰を下ろしたり、丁寧な態度で接し、傾聴をしてもこのよ

うな前提を認識しているかどうかで、認知症高齢者が受け入れる雰囲気かどうかというのは変わってくるように思います。

3. 関係論的アプローチ

まずグループをつくろうよ…一人で閉じこもっていくら訓練しても、失語症は治りません。まず人間関係を作りましょう。…人間関係があって、何かしゃべりたいという気持ちがあって初めて、言葉というのは出てくるからです。本書.p.236

本書の中で目に鱗の一節でした。失語のある患者には言語療法、運動麻痺のある患者にはリハビリテーションというように、私たちは、患者の問題を自然科学的に個体を中心に考えているのかもしれませんが。しかし、そこに関係というエッセンスを投じることによって問題解決のためのアプローチは力動的になり、患者は意欲によって生き生きとするように思います。

私は、看護教育の中でクリティカルシンキングを教え込まれ、一側面的な見方をしないように、高齢者ケアに関わってきたつもりでした。しかし、それはどこか頑固であったように思います。本書の、介護現場に携わる著者の考え方をすることで、自分の関わる領域の理論や価値観のみを妄信的に活用していたのだとハッとしました。

他職種の考え方をすることで、自分が行うケアの柔軟性と深みが増し、高齢者が生き生きとするケアができるのだと思います。

学生の皆さんはそれぞれの専門領域の基礎を学んでいるところだと思いますが、対象者の捉え方、自分のケアの引き出しを増やすという意味でも他職種理解を図ることをお勧めします。その一方法として読書を活用していただければ幸いです。

【ご紹介の本】

三好春樹：関係障害論＜新装版＞、シリーズ考える杖、雲母書房、2019年

※当館では、初版を所蔵しています。

請求記号 369.26 : Mi91

関連 DVD も所蔵しています。

関係障害論（三好春樹の介護プロ養成シリーズ）Vol.1 Vol.2

請求記号 A369.26:K:1/A369.26:K:2